

2025 年「伊勢」と日本スタディプログラム 最終レポート

この地を訪れる前、私は神道についてほとんど知りませんでした。しかし、実際に参拝し、神職の方々に導かれて一般の観光客が入れない聖域に入り、万物に魂が宿ることを教えていただきました。荘厳な神楽舞を目の当たりにし、神々への敬意を抱きながら、正座を続けた後の足の痺れも忘れるほどでした。特に印象的だったのは、神職の方々が自分たちの職業をどう見ているかということです。一部は生計のために働く「サラリーマン神職」であり、これは「学術の労働者」と「学術を志す者」の二つの志向を思い起こさせました。神職の方々は「神聖」という言葉を口にせず、むしろ儀式そのものを描写する傾向があります。これは文化翻訳を手伝うフィールドワーカーたちをやきもきさせます。キリスト教に由来する「神聖」という言葉は、明治時代に日本に伝わった後、神職の日常には根付きませんでした。これは異なる言語、知識、文化の衝突の緊張を示しています。神社の正しい参拝方法とは？鳥居をくぐる前のお辞儀は、隣の家にあ挨拶するようなものです。手と口と心を清める儀式、そして二礼二拍手の細かい動作（90度のお辞儀）が印象的です。2月の風神が木々を揺らし、身も心も引き締まる感覚を覚えました。

「おかげ」は伊勢の歴史と文化を理解する上で重要な言葉で、「助力」と訳し、「力添え」を意味します。「お陰様で」は神道と密接に関わります。佐野先生は「神社を訪れることは、自身の内なる力を呼び起こすためです」と語りました。これは中学生時代に心に刻まれた「God Helps those who helps themselves」という言葉を思い出させました。また、「常若」も伊勢の精神の核心です。戦後広がった「遺産政治」は伊勢神宮には及びませんでした。塩川先生が言うように、「それは生きており、持続可能で、永遠に新しくあります。」20年ごとの「式年遷宮」は、街に活力を与え、「神都」と「聖地」の称号は、その唯一無二の存在価値を保証しています。

神聖な体験だけでなく、私たちは多くの日常的な交流活動も行いました。国際交流協会の案内で、伊勢市民と一緒に和菓子とパールブレスレットを作り、鳥羽海岸を訪れました。異文化体験の面白い話を共有し、バンドを組んで音楽ストーリーを作る未来についても語り合いました。「国際交流を広める」こと自体が一つの文化であり、私はその文化の中で、多くの興味深い出来事を目撃しました。

最も印象的だったのは、熊野三山の旅です。なぜ熊野と呼ばれるのでしょうか？古代の「神」の発音が「熊」(kumo)と同じであったという説があります。これは「死霊が隠れる場所」を意味します。熊野は世界文化遺産に登録されていますが、聖地というよりは修行地または霊場であり、聖地への入り口と見なされています。私たちはまず花窟神社を訪れました。この神社は神々の墓所とされ、社殿自体が巨大な岩で、椿の花が植えられています。すぐ近くには25キロに及ぶ七里御浜の海岸線が広がっています。佐野先生は、なぜここが古代に「難所」と呼ばれたのかと尋ねました。実際にその道を歩いてみて初めて理解しました。古代の人々は草鞋を履き、石の道を歩くのは非常に困難で、砂の道は柔らかいが体力を消耗します。その後、特別参拝を行いました。私たち15人は神殿の中央に座り、何度か頭を下げると、背後にある賽銭箱に硬貨が落ちる音が聞こえ、その後拍手の音が響きました。私たちは後ろにいる人々に見守られ、出口で一口のお神酒をいただき、神社からの贈り物を受け取り、特別な榮譽を感じました。最も印象的だったのは、神倉神社の登山です。まず比較的平坦な女坂を登り、次に急な男坂を下りました。下りるときは滑らないように手と足を使わなければなりません。下山後、皆の気分は爽快でした。神道の世界観で説明するなら、これは神々が私たちを歓迎し、エネルギーを与えてくれたのかもしれない。

伊勢という場所に対して、身体的な親しみを感じるようになりました。毎日の学校とアパートの通勤、住民区を訪ね、スーパーで夕食を作り、清々しい空気を感じました。主観的な「場所」が立体的に構築され、Google マップ上の平面データと共存しています。私は伊勢という場所が好きになり、今後も応援していきたいと思います。

今後、私は現代日本の観光と旅行文化の歴史をさらに探求していきます。例えば、80年前の小学生の伊勢修学旅行は、現代で言う「特種兵旅行」のようなものでした。30～40年代の伊勢音頭や蓄音機、10銭でそば一碗が買えた硬貨を目の当たりにし、あの時代の素朴さと純真さを感じることができました。さらに遡ると、江戸時代には「お陰参り」と呼ばれる、信仰と観光が混ざった巡礼がありました。伊勢の「御師」についても非常に興味を持っています。彼らは年に一度「檀家」を訪れ、祝福をもたらし、巡礼者を聖地に案内しました。これらの知識と感覚は、伊勢を訪れたからこそ得られたものです。この機会と出会った皆さんに心から感謝し、これからも繋がりを大切にしていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

“Ise” and Japan Study Program 2025 Final Report

來到這片土地之前，我對神道僅有一知半解。然而，親身拜訪後，神職人員帶領我們走進了一般遊客無法進入的聖域，細細解說萬物皆有靈的道理。我們更有幸親眼目睹莊嚴的神樂舞，懷著對神靈的敬意，即便半小時正座後腿腳發麻，也顯得微不足道。特別讓我感慨的是，神職人員如何看待自己的職業。其中一部分是為謀生的「工薪族神職」，這讓我想起「學術搬磚人」與「學術為志業」的兩種取向。神職人員們不常將「神聖」掛在嘴邊，而是更傾向於描述儀式本身，這讓協助文化轉譯的田野工作者們頗感焦急。源自基督教的「神聖」一詞，自明治時期傳入日本後，並未在神職的日常中生根發芽，這也彰顯了不同語言、知識與文化碰撞之間的張力。如何正確參拜神社？進入鳥居前的一鞠躬，如同到鄰居家打招呼般自然。洗滌手口心靈的環節，以及二拜二拍手中的細節（90度的鞠躬），令人印象深刻。二月中呼嘯而過的風神，穿林打葉，令人精神抖擻。

「おかげ」是理解伊勢歷史與文化的關鍵詞，翻譯為「助力」，意指「力添え」。「お陰様で」與神道密不可分。佐野先生曾說：「到訪神社是為了喚起自身的內生動力。」這讓我想起中學時代銘刻在心的一句話：「**God Helps those who helps themselves.**」此外，「常若」也是伊勢精神的核心。二戰後盛行的「遺產政治」並未蔓延至伊勢神宮。如塩川先生所言，「它是活著的，永續發展，歷久彌新。」20年一次的「式年遷宮」，讓這座城市不斷煥發活力；「神都」與「聖地」的名號，則確保其獨一無二的存在價值。

除了神聖的體驗，我們還有許多日常的交流活動。在國際交流協會的帶領下，與伊勢市民們一起製作和菓子和珍珠手鍊，還與鳥羽海岸短暫相遇。大家聊了不少異文化體驗的趣事，還共同暢想了組建樂隊的未來。「推廣國際交流」本身就是一種文化，而我就在此文化之中，見證了許多奇聞軼事的匯聚。

最令我難忘的是熊野三山的旅行。為什麼叫熊野？古代「神」的發音與「熊」一致（kumo），意為「死靈隱藏之地」。熊野被列為世界文化遺產，更多被視為修行地或靈場，是通往聖地的門戶。我們先參觀了花窟神社，這座神社被視為神靈的墓所，社殿本身就是一塊巨大的岩石，旁邊種植著椿花。不遠處是長達 25 公里的七里御浜海岸線。佐野老師問我們，為什麼這裡在古代被稱為「難所」？直到我們親自走過這段

路，才真正理解：古代人穿著草鞋，走在石頭路上非常困難，而泥沙路雖然柔軟，卻極耗體力。之後的特別參拜中，我們一行 15 人坐在神殿中央，幾次低頭鞠躬時，不斷聽到身後賽錢箱中硬幣掉落的聲音，隨後是合掌的聲音。我們被身後的民眾注視著，結束後還在出口處喝了一小口酒，並收到了神社的禮物，感到特別榮幸。最令人印象深刻的是攀登神倉神社的經歷。我先從較為平坦的女坂登山，再從陡峭的男坂下山。下山時，為了防止滑倒，我不得不手腳並用。下山後，大家都感到精神煥發。如果用神道的世界觀來解釋，也許這是神靈在歡迎我們，並賦予了我們能量。

對伊勢這個地方，我開始有了身體上的熟悉感。每日往返於學校與公寓之間，走訪居民區，逛超市做晚飯，嗅到清涼的空氣，感受狂風刮過耳朵的疼痛。一種主觀意義上的「地方」逐漸被立體地建構起來，與谷歌地圖上的平面數據庫共存。我也開始喜歡上了伊勢這個地方，希望未來能為其應援。

今後，我的研究將更多追溯當代日本觀光與旅行文化的歷史。例如，80 年前的小學生伊勢修學旅行，宛如現代的「特種兵旅行」。有幸觀覽上世紀 30 至 40 年代的伊勢音頭、蓄音機，以及 10 錢一碗蕎麥麵的硬幣，彷彿穿越時空，感受到那個時代的質樸與純真。再往前追溯，在江戶時代，人們會偷偷離開家，前往伊勢神宮參拜，這也被稱為「お陰参り」，是一種混合了信仰與旅遊的朝聖之旅。我對伊勢的「御師」充滿好奇，他們每年會拜訪「檀家」，帶來祝福並引導朝聖者參觀聖地。這些知識與感受都是我來到伊勢才深刻體會到的，非常感謝這次機會以及遇到的大家，希望大家保持聯繫，常見常新！